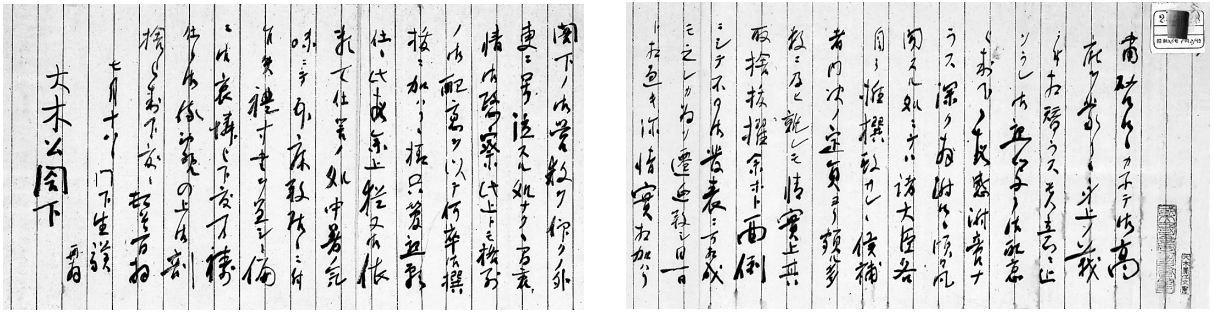

大木喬任宛渡辺驥書翰

（明治［二十三］年七月十八日）

（「大木喬任関係文書」479―19）

（写真は部分。全文翻刻は本号五七頁掲載）

明治二十三年（一八九〇）夏、第一回帝国議会の開設を控えて、貴族院議員の選挙・選任が始まった。最初に行なわれたのは多額納税者議員（通称「長者議員」）の選挙（六月十日）で、伯爵・子爵・男爵議員の選挙が七月十日に実施された。皇族議員・公爵・侯爵議員は法定資格で任ぜられるので選挙・選任はない。最後に行なわれたのが勅選議員の任命で九月二十九日に五十九名が選任された（十月一日と二十四日に各一名を追加）。形式上は天皇の勅選とされるが、実際は内閣が銓衡した者を天皇の名で任命する仕組みである。

この書状は渡辺驥元老院議官が大木喬任に対し七月十八日に発した使書で、自分を貴族院勅選議員として内閣に推薦してくれるよう訴えたものである。候補者が「内決の定員より頗る多数」に及んでいるため、決定が遅れていることを報じ、自分は現在の内閣に知名度が低いため、大木の助力に頼らなければ忽ち候補から外されてしまうとして尽力を求めている。渡辺は八月二十四日にも重ねて同様の書状を大木に送っており、大木が持つ準元勲的な影響力・司法界を代表する人物としての発言力に並々ならぬ期待をかけていたことが知られる。渡辺は勅選議員の初回選任で議員に選ばれ、二十九年に死去するまで在任した。

（佐々木隆）